

2024年3月総評 暮田真名

今月から選者に加わりました。川柳人の暮田真名と申します。

過去に奨学生としてお世話になっていた口語詩句投稿サイトに選者として参加できること、うれしいです。みなさんと一緒に詩の世界を冒険していけたらと思います。

石鹼玉ちゃんと自信がある友達

/ 吉沢美香

「ちゃんと自信がある」という把握が正確。この「友達」を見つめる視線には「それにひきかえ自分は……」という自意識が貼りついているように見える。しゃぼん玉の表面にうずまくマーブル模様が心のゆらぎのようでまぶしい。

パジャマからパジャマに

着替え夕桜

/ azusa

「パジャマからパジャマに」ということは、この句の人物はこの日一度も外に出ていないんだと思うけど、それでもこれほどまでに実感のある桜の句が詠めるということに、桜という季語の厚みを見せてもらったようでうれしくなった。

ずぶ濡れのキリンの夢を見た後は

目薬を弟に預ける

/ 常田瑛子

「ずぶ濡れ-目薬」という二つの液体の蝶番にあたる位置に「見る(=眼球=涙をたたえているもの)」を配置する手つきが巧み。この「弟」には不思議な一蓮托生感がある。それも血縁(=血液)という液体のイメージが連れてきたものだからだろう。

クーピーの白の長さで雨は降る

ホームルームの不審者情報

/ 狛犬吠

雨を直線で描く技法は歌川広重などにあるが、その線の長さが「クーピー」という描画のためのツールで喩えられているところに奇妙なねじれがある。その不安感が下句への接続をスムーズにしている。

マクドナルドの空の壁紙水温む

/ 奥井健太

「マクドナルドの空の壁紙」を発見したところがすごい（現実のマクドナルドに空の模様の壁紙が貼ってあるかどうかは関係がない）。春になってあたたかくなる川の水と空にのぼって雲になる水は同じものだが、「空の壁紙」に描かれた雲はにせものである。思えば、マクドナルドには常ににせものの悲しさが漂っている。

淡雪にかたつむり管びやびやと

/ 蝸牛

「かたつむり管」というのは人間の耳のなかにある器官のことで、かたつむりのことではない。それなのに、「びやびや」という擬音はあまりにもかたつむりにぴったりだ。「びやびや」の冷たい響きから雪の降る日の耳の冷たさも思い出され、雪とは意外にも耳と縁の深い現象ではないかということにも思い至る。

人生は永い留守番

虹滲む

/ 小里京子

「人生は」という箴言風の入り口に身構えたが、「永い留守番」は完璧にきまっている。下五の「にじにじ」の音も、待ち人が現れないまま過ぎていく時間の遅さをよく表している。

僕たちも

めちゃくちゃをしてきたじゃない

犬にお菓子の名前をつけて

/ ひろみ

たとえば「クッキー」は犬につける名前としてはありふれているのに、犬に「お菓子の名前」をつけるのはなんだかとてもひどいことのように思える。この発見があるから、上句の「めちゃくちゃをしてきた」にも真実味が宿る。

うさぎの名まよいつつ見る春の雲

/ さいう

うさぎを家に迎え入れたばかりで、まだ名前をつけていないのだろう。うさぎの名前も、まだ名前がついていないうさぎも、春の雲のようにおぼろげだ。ペットとの関係は「名前をつける」ということに始まるのかもしれない。不可逆な変化を前にたゆたう気持ちをうまく表現している。

離陸って

飛行機が生まれる前は

無かった言葉？

あの心臓も？

/ 大嶋碧月

言葉と現実をめぐる緊張を孕んだ関係を切り取った歌。下句の「心臓」は唐突なようで、飛行機が（「作られる」や「できる」ではなく）「生まれる」という有機的な言い回しによって準備されている。